

ワカヤマソウリュウの復元

恐竜やナウマンゾウのような巨大な生物化石の発見は、大きな話題を呼びます。しかしながら多くの場合、全身が完全に見つかることはありません。死んだときや、土の中に堆積したときなどにバラバラになり、化石として見つかるころには一部しか残っていないことがほとんどです。鳥屋城山で見つかったワカヤマソウリュウの化石は、全身の8割が残っていたということで、中生代白亜紀の巨大生物としては国内を見渡してもあまり例がないくらいに保存状態の良い標本と言えます。

この骨格を見ると、だいたいの姿や大きさが分かります。ここから、ワカヤマソウリュウの生きていた姿はどうやって復元するのかを見ていきましょう。

●復元方法

恐竜やモササウルスなどの絶滅した生物は、よく似た種類の生物がないため、参考にできる材料がありません。骨に残された筋肉の付着部や、まれに見つかり始めた羽毛や皮膚化石などの新たな発見をもとに、毎年のように正確な姿が刷新されています。

モササウルスの一種

であるワカヤマソウリュウは、骨の形から、これまで発見されている種類と比べ非常に大きな手足を持ち、また、背びれを持っていた可能性が指摘されました。

このような特徴から、従来のモササウルスとは少し感じの異なる姿で復元されていますが、これらは体の大部分が見つかったことにより、正確な情報を明らかにすることができたと言えるのです。



3Dプリンタで打ち出したワカヤマソウリュウの全身骨格

●色はどうやって付けたのか

イラストで復元された色はどのように決まるのかというと、これについては骨から「正しい」色にはたどり着けません。そこで、古生物の復元イラストでよく用いられる方法としては、よく似た生物の色を借りてくるということが行われます。ただ、モササウルスはグループごと絶滅しているの、よく似た海の爬虫類（はちゅうりゅう）というとせいぜいウミヘビやウミガメが挙げられるくらいです。そのため、ワカヤマソウリュウの場合は、ウミヘビの水玉模様をアレンジして彩色されています。



彩色されたワカヤマソウリュウの復元イラスト
(提供：和歌山県立自然博物館)